

潜入捜査官は署で正体がバレて 陵辱され晒し動画で筋肉刑事が 堕ちる

R18

2026・9・24

目次

第01話

第02話

第01話

「初日から遅えぞ。走れ」

運転席の男が窓から顔だけ出して怒鳴った。

剣崎蓮はトラックの荷台から飛び降りる。

潮の匂いに機械油の匂いが混じっていた。

蓮は、県警本部の組織犯罪対策課にいる刑事だ。

今日から三か月、港米運輸の倉庫で下働きをする。

蓮は荷台の縁を蹴り、倉庫のシャッターへ走った。

「新入りか」

シャッターの前で事務の男が名札を放ってよこした。

蓮は片手で受け止める。

マジックで「蓮」とだけ書いてある。

「うちは下の名前で呼ぶ。名字は要らねえ」
名字を聞かれないのはありがたかった。

剣崎という名字はこの港で一度も口にできない。

「前はどこにいた」

事務の男はペンの尻で耳をかきながら聞いた。

「引っ越し屋だ。腰をやって辞めた」

「その体で腰か。ここの荷は、冷蔵庫より重いぞ」

出てくる前の晩、本部の係長は言った。

『正体が割れても、本部は知らん顔をする。
お前一人で切り抜けろ』

それを承知で蓮は自分から手を挙げた。

港栄運輸の倉庫には表に出せない荷が出入りしている。

警察の手入れの日取りは、なぜか毎回、前の晩に漏れていた。

シャッターの隙間から運河の向こう岸に港署の白い壁が見える。

——漏らしているのは、あの中の誰かだ。

倉庫の奥から男が一人歩いてくる。

下働きたちが一斉に口を閉じた。

倉庫長の梶朗だった。

背は蓮より頭半分低いが、そのぶん段ボールを片手で掴めるほど手が大きい。

唇の端に火のついていない煙草をくわえていた。

梶は蓮の肩から腕へ目だけを動かした。

「デカいな。動く荷物にちょうどいい」

「運ぶほうで雇われたはずだ」

「口の減らねえ荷物だ。落としたら、今日の
日当は半分だぞ」

梶は段ボールの束を蓮の胸に押しつけた。

蓮は二箱を重ねて抱え、通路を走る。

下働きの一人が横から足を出した。

蓮は半歩ずらして、その足をよけた。

「よけ方が上手いな。どこで覚えた」

梶の声が背中に刺さる。

「ラグビーだ。高校から大学まで」

「道理で、耳が潰れてる」

蓮の右の耳はスクラムで何度も擦られて形が崩れている。

午前中は入ってくる荷の積み下ろしが続いた。

「遅え。二段で積み」

「肩で担ぐな。腰で持て」

「そこは通路だ。荷を置くな、置くならてめえが寝ろ」

梶の声が倉庫の端から端まで飛んでくる。

箱を抱えて走るたびに作業着の背中が汗で黒くなっていく。

梶は一度も時計を見なかった。

見ているのは蓮の動きだけだった。

昼前、倉庫の前の道をパトカーが通った。

蓮の目が勝手にそれを追う。

「パトカーが通るたびに、目で追うな」

すぐ後ろに梶が立っていた。

「刑事みてえだぞ」

「……ガキの頃、さんざん補導されたクチで
な。見ると首が勝手に向く」

梶はくわえた煙草を反対の端へ移した。

それきり、何も言わなかった。



午後、奥の棚で油の缶が倒れた。

黒い油が蓮の作業着の胸から腹まで染みてい
く。

「上、脱げ。油臭えまま客の前に出るな」

梶の声に、下働きが三人、手を止めて寄って
きた。

蓮は作業着のボタンを外す。

ラグビーで作った胸板と割れた腹が灯りの下に出た。

下働きの一人が口笛を吹いた。

「すげえ腹。洗濯板かよ」

「ついでだ。下も脱げ」

「……油がかかったのは上だけだ」

「新入りは全員やる。服に盗聴器を縫いこんでくる奴がいるんでな」

梶は火のない煙草の先で蓮のベルトを指した。

——来ると思っていた。

盗聴器は持っていない。

警察手帳も、アパートの駐車場に停めた古い軽自動車の、助手席の下に置いてきた。

ここで拒めば、潜入はこの場で終わる。

蓮はベルトを抜き、作業ズボンを足首まで落とした。

「パンツもだ」

下働きたちがにやにやと笑う。

蓮はボクサーパンツの縁に指をかけ、一息に下ろした。

冷えた倉庫の空気が剥き出しの尻と股に触れる。

「うわ、でけえ」

「ちんこまで筋肉じゃねえか」

「ケツもでけえな。トラックの荷台みてえだ」

蓮は天井の鉄骨だけを見た。

梶は蓮の前にしゃがみこんだ。

耳の裏をめくり、脇の下をなぞり、足の指の間まで広げていく。

「脇は」

「……何もねえだろ」

「決めるのは俺だ」

梶は胸ポケットのボールペンを抜いた。

ペンの先が蓮のちんぽの下にもぐりこむ。

竿ごとぐいと持ち上げられた。

「裏に貼りつけてくる奴もいる」

梶は顔を寄せ、持ち上げたちんぽの裏を覗きこんだ。

ペンの先が玉の皮を一度つつく。

「縮こまってるな。怖えのか」

「寒いだけだ」

「こんだけ縮んでて、この重さか。ボールペンがしなるぞ」

下働きたちが腹を抱えて笑った。

梶がペンを抜く。

ちんぽが自分の重さで垂れ下がり、腿の間で揺れた。

「後ろを向け。壁に手をつけ」

蓮はコンクリートの壁に両手をついた。

「ケツを開け。自分の手でな」

「梶さん、そこまでやるんすか」

「そこに仕込んでくる奴が、いちばん多いんだよ」

蓮は壁から片手ずつ離し、自分の尻の肉を左右に割った。

穴に倉庫の冷たい風が当たる。

「穴の奥に、小さい機械を入れてくる奴もいる」

ボールペンの尻が穴の縁をぐっと押した。

その瞬間、蓮の体が勝手に動いた。

振り向きざまに梶の手首を逆にとっていた。

犯人を押さえるときの取り方だった。

カラン。

ボールペンが床に落ち、コンクリートの上を転がっていく。

「……今の取り方、どこで覚えた」

「ラグビーだ」

「ラグビーで、手首を逆にとるのか」

次の瞬間、梶の足が蓮の軸足を払った。

ドン。

裸の体がコンクリートに叩きつけられた。

息が詰まる。

梶の膝が背中の中に乗った。

蓮はうつ伏せで膝と胸を床につく格好になる。

尻だけが下働きたちのほうへ突き出ていた。

「覚えとけ。ここじゃ、俺の手を取った奴は床を舐める」

梶の声は低かった。

「俺はな、でけえ男が自分から膝をつくのを見るのが好きなんだ」

「……床なら、もう顔で舐めてる」

「これは、俺が押しつけてるだけだ。自分からつくのとは違う」

「一生ねえよ」

梶の膝が背骨にもう一段沈んだ。

「筋肉刑事みてえなケツしてんな」

若い下働きが蓮の尻を見下ろして笑った。

梶は振り向きもせずにその男の脛を蹴る。

「余計な口をきくな」

若い男は脛を抱えて、うずくまった。

そのとき、表の道でサイレンが鳴った。

パトカーが一台、倉庫の前を走り抜けていく。

蓮の背中が固まった。

「署のパトだ」

下働きの一人が窓の外を見て言った。

「気にすんな。あそこの連中は、うちのお得意さんだ」

梶は膝を乗せたまま、つまらなそうに言った。

——お得意さん。

サイレンはすぐに遠ざかった。



梶はようやく膝を下ろした。

油まみれの作業着を足で蓮の顔の前へ蹴ってよこす。

「着ろ。今日はここまでだ」

蓮は床のパンツを拾い、背中を向けて穿いた。

背中の中ん中に梶の膝の形が赤く残っている。

事務の男が端末のカメラを蓮の顔に向けた。

カシャ。

「名簿の写真だ。記号はR-09。蓮で登録し
とく」

梶が画面を覗きこみ、横から付け足した。

「備考に書いとけ。蓮、三十二、倒されても
目が死なねえ」

「備考なんか要らねえ」

「ここじゃ、紙に載ったとおりに扱う」

事務の男が明日の配送票を蓮の胸に押しつけた。
た。

蓮はいちばん下の行で目を止める。

『納品先 港署 交通課（レッカー車両）』

「……署とも取引があるのか」

「放置車両のレッカーを請け負ってる。署の
中まで入れる業者は、うちだけだ」

事務の男は自慢げに胸を張った。

梶が火のない煙草の先で蓮を指す。

「新入りが、いちいち取引先を聞くな」

梶はシャッターの前まで蓮を見送りに出た。

「明日も来い」

「日当が半分のままじゃ、帰れねえからな」

「来なけりゃ、こっちから迎えに行く。アパートの場所は、履歴書に書いてあった」

蓮は答えなかった。

梶は火のついていない煙草を唇から外す。

「それと、歩き方を直せ。膝から下がまっすぐすぎる。制服を着てた奴の歩き方だ」

ガラガラガラ。

シャッターが下りる音が港の端まで響いた。

第02話

二日目の朝。倉庫の事務所。

「今日は配車の手伝いだ。署に書類を届けてこい」

梶が茶封筒とファイルを机の上に滑らせた。

ファイルには昨日レッカーで運んだ車の書類が綴じてある。

茶封筒には糊で封がしてあった。

「封筒は、刑事課の神崎って刑事に直接渡せ。中は見るな」

——神崎。

昨夜、アパートに本部の係長から短いメッセージが届いていた。

『港署の神崎剛に気をつけろ。港栄に一番近い刑事だ』

その神崎のところへ、梶は自分から蓮をやるうとしている。

事務の男が刷ったばかりの名刺の束を差し出した。

『港栄運輸 配車係 佐野蓮』

「履歴書の名で刷った。署の連中は、名で呼ぶからな」

佐野は本部が用意した偽の名だ。

蓮は名刺を胸ポケットに差した。

「運転は、あいつがやる」

梶が顎で示した先に黒いセダンが停まっていた。

運転席には昨日トラックの窓から怒鳴った男が座っている。

後ろの席では、昨日脛を蹴られた若い下働きが、にやにやと手を振っていた。

「署の前で待たせとく。寄り道すんなよ」

梶は火のない煙草を唇の端へ移した。



セダンは運河の橋を渡り、港署の玄関の前で止まった。

ロビーは朝から免許の更新に来た人で混んでいる。

蓮はファイルを脇に抱え、刑事課のある二階への階段へ向かった。

階段の上から背広の男が二人降りてきた。

前を歩くのは五十代の男で目が薄い。

胸の名札に『副署長 黒川』とある。

後ろの男は灰色のくたびれた背広を着て、ガムを噛んでいた。

「神崎くん。レッカーの業者が来ているよ。君の係だろう」

黒川は蓮のほうを一度も見ずにそのまま玄関へ歩いていった。

ガムを噛んでいた男が蓮の前で足を止めた。

「港栄の新しいのか」

神崎剛は蓮の頭のとっぺんから靴の先まで目を下ろした。

「ずいぶんデカいのを寄こしたな。こっちだ」

神崎は刑事課の横の小さな部屋へ蓮を入れた。

机が一つと椅子が二つあるだけの部屋だ。

蓮は扉が正面に見えるほうの椅子に座った。

「レッカーの書類です。それと、梶から封筒を預かってきました」

神崎は書類を脇へ押しやり、茶封筒の封を指で破った。

「中を見るなど言われています」

「そいつは、お前が守る話だ」

封筒から出てきたのは紙が一枚だった。

倉庫の下働きの名簿の写しだ。

『R-09 蓮 三十二』

横に昨日撮られた蓮の顔写真が刷ってある。

紙の端に梶の字で一行だけ書き足してあった。

『洗ってくれ』

神崎は紙と蓮の顔を見比べた。

「へえ。自分の身元照会を、自分で運んできたのか」

蓮は動揺した。

「梶さんは用心深くてな。新入りは全員、俺に洗わせる」

神崎はガムを噛みながら、机に肘をついた。

「前の仕事は」

「引っ越し屋です」

「その前は」

蓮は一拍だけ間を置いた。

「……自分は、ずっと引っ越し屋で」

神崎のガムが口の中で動かなくなった。

「『自分』か」

「……」

「警察学校か、自衛隊か、体育会か。そのへんで叩きこまれる言い方だ」

「ラグビー部です」

「ラグビー部ね。耳は本物だな」

神崎の目が蓮の足元へ落ちた。

「その靴」

蓮は自分の黒い革靴を見下ろした。

「底の外側だけが減ってる。一日じゅう歩き回る仕事の減り方だ」

「引っ越し屋は、足で稼ぐんですよ」

「引っ越し屋は、革靴で冷蔵庫を担がねえ」

神崎が急に椅子から立ち上がった。

蓮の右手が腰へ飛ぶ。

何もない腰を指が一度だけ撫でた。

「……今、腰に何を探した」

「携帯です」

「携帯なら、左の尻のポケットだ。座るときに角が見えた」

蓮は何も返せなかった。

神崎の上着の中で携帯が鳴った。

神崎は画面を見て、口の端を上げた。

「ああ、梶さん。……今、目の前にいる。……写真どおりだ。デカイ。……急ぐなよ。洗うのは俺の仕事だ」

電話を切った手で神崎は椅子を引き寄せて座り直した。

「倉庫で素っ裸にされたんだってな」

「……」

「ボールペンでちんぽを持ち上げられて、ケツを開かされて、梶さんの手首を逆にとった。梶さんが、電話の向こうで笑ってたぞ」

名刺が指で弾かれて机の上を滑ってきた。

「佐野さん、だったな」

「……名刺のとおりです」

「明日も来るなら、靴を替えてこい。その靴じゃ、刑事にしか見えねえ」



黒いセダンが署の玄関の前で待っていた。

蓮が後ろの席に乗りこむとドアのロックが下りる音がした。

隣には若い下働きが座っている。

車が運河の橋を渡りはじめた。

運転席の男がミラー越しに蓮を見た。

「梶さんに言われてる。署から戻る奴は、全部調べろってな」

「書類を置いてきただけだ」

「署で何か受け取ってねえか、確かめるんだよ」

若い男の手が蓮の作業着の胸を叩いた。

胸から脇へ、脇から腰へ、手が下りていく。

手はベルトの上で止まらなかった。

ベルトの内側に指が入り、パンツのゴムをくぐる。

蓮はその手首を掴んだ。

「手を放せ、蓮」

運転席の男の声が低くなった。

「梶さんに言うぞ。こいつ、今日も手首を取りましたってな」

蓮は指を開いた。

若い男の手がパンツの中へ潜りこんだ。

ちんぽを根元から握られる。

「うお、柔らけえのにデカイ」

「……車の中だぞ」

「だから何だよ」

橋を渡りきったところで信号が赤に変わった。

横断歩道を背広の男たちが列になって渡っていく。

窓ガラス一枚向こうだ。

若い男の手がパンツの中でちんぽを扱きはじめた。

根元から先へ。

先から根元へ。

亀頭のくびれを親指がこすった。

「……っ、ぐ」

「外から見られたらどうしよう、って顔してんな」

「……やめろ」

「こっちは、もっとって言ってるぜ」

ちんぽが若い男の手の中で硬くなっていく。

蓮には止められなかった。

「おい見ろよ、勃ってきた。署帰りでおっ立ててやんの」

「前の奴ら、誰もこっちなんか気づいてねえよ」

運転席の男がミラーの中で笑った。

「……窓の外から、丸見えだろうが」

「だったら、せいぜい胸張っとけ」

先からぬるりと我慢汁がにじむ。

若い男はそれを親指で亀頭に塗り広げた。

クチュ。

パンツの中で濡れた音がした。

信号が青に変わる。

車が動き出しても手は止まらなかった。

蓮は前の座席の背もたれを睨みつけた。

右手がまた勝手に腰へ行く。

何もない。

「……てめえ、あとで覚えてろ」

「こっちは忘れてねえよ。昨日、梶さんに脛を蹴られたのは、お前のケツのせいだからな」

扱く手が速くなった。

グチュ、グチュ。

パンツの中で濡れた音が続く。

「ア……ッ、く、そ」

「声出てんぞ。署の刑事さんに聞かせてやりたかったな」

玉がきゅっと上がっていく。

「待て、止めろ、ほんとに、出る」

「いいぞ。パンツん中にぶちまけろ」

次の信号でまた車が止まり、歩道の女が窓の横を通り過ぎた。

その瞬間、若い男の親指が、亀頭の割れ目をぐりっと押しこんだ。

「——ッ、ぐ、ア……ッ」

ドクッ。

パンツの中でちんぽが跳ねた。

ドクッ、ドクッ。

熱い精液がパンツの布と若い男の手のひらの間にあふれていく。

蓮は声を歯の裏で噛み殺した。

腰が座席の上で二度、三度と跳ねた。

「うわ、出た出た。すげえ量」

若い男は精液まみれの手をパンツから抜いた。

指の間で白い精液が糸を引いている。

「梶さんに報告だな。署帰りの配車係が、車の中でパンツに漏らしましたって」

若い男は濡れた指を蓮の作業着の胸で拭いた。

運転席の男はミラーから目を離さなかった。

「お前の仕事は、荷物運びだ。刑事の真似はするなよ、蓮」

車が倉庫の前に着いた。

作業ズボンの股に濃い染みが広がっていた。

シャッターの前に立っていた梶がその染みに目を落とした。

梶は何も言わずにくわえた煙草を反対の端へ移した。



同じ日の夕方。港署の資料室。

神崎は棚の一番下から古いアルバムを抜き出していた。

県警の警察学校の、卒業アルバムだ。

名簿の年齢から十年ほど前の期に当たりをつけてある。

三冊目をめくったところで神崎はガムを噛むのをやめた。

短く刈った髪。

潰れた右の耳。

周りの誰より、肩の幅が広い。

「野坂」

神崎は資料室の前を通りかかった若い刑事を呼び止めた。

野坂誠は眼鏡を指で押し上げながら入ってきた。

「お前、この期だったよな」

アルバムを覗きこんだ野坂の目が、眼鏡の奥で大きく開いた。

「……剣崎です。同期の」

「今、どこにいる」

「本部の、組対です。去年、あいつが引っぱられて……」

野坂の声が途中で細くなった。

「本部の組対が、港栄で段ボールを運んでる」

神崎は写真の中の顔を指で叩いた。

「名刺の名字は、佐野だとよ」

「どうして、剣崎が……」

「潜ってるんだよ。港栄と、港栄に手入れを漏らしてる刑事を釣りにな」

神崎は自分の胸を親指で指した。

「釣られる側は、俺だ」

野坂は何も言えずに眼鏡を押し上げた。

「誰にも言うな。お前は今日、ここで何も見てない」

「……神崎さんは、どうするんですか」

「どうもしねえよ。本部のエリート様が、所轄の前でどこまで脱げるか見るだけだ」

神崎は写真を台紙から剥がした。

背広の胸ポケットに写真を差しこむ。

噛んでいたガムを空いた台紙の上に吐き捨てた。

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01054794.html

奥付

作品名 潜入捜査官は署で正体がバレて陵辱され
晒し動画で筋肉刑事が堕ちる

サークル タビューへ

発行日 2026・9・24

レーティング R18